



SPACE No.43

日本臨床心理身体運動学会会報第 43 号 2024 年 8 月 10 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

【第 76 回研修会・第 47 回講習会】

この度の令和六年能登半島地震で亡くなられた方々に深く哀悼の意を表し、被災された多くの皆様
にこころよりお見舞い申し上げます。また支援に当たられている関係者の皆様に厚く御礼申しあげま
す。そして被害が今以上に拡がらないことを祈念いたします。

2024 年 6 月 16 日（日）にキャンパスプラザ京都 6 階 京都文教大学サテライト教室において、
日本臨床心理身体運動学会 第 76 回研修会および第 47 回講習会が、京都文教大学心理臨床センター
との共催で対面形式およびオンライン形式のハイブリッドにて開催されました。いずれもその当事者
の深い思いが、絵そして語りの中に現れていて、中身の濃い発表、そしてディスカッションとなりま
した。参加者および発表者の 2 名の方からコメントを頂きました。

第 47 回講習会（講師：山 愛美先生）

『画家香月泰男と『シベリアシリーズ』の世界』を聴講して

伊藤麻由美（帝塚山大学）

2024 年 6 月 16 日にキャンパスプラザ京都にて行われた第 47 回講習会に参加しました。講習会を
受けて、香月氏が何を表現しようとしていたのか、また、なぜシベリアを描き続けたのかを考えまし
た。

今回の講習会で、香月氏が初期の作品から数年間、シベリア・シリーズを描いていなかったことを
初めて知りました。初期の作品は、赤や青などからあたたかさや生命力が感じられる一方で、その後
の作品からは死や暗闇が連想されました。また、作品を描くにあたって木炭から絵具を自ら作って
いたと知り、そのような作業は、描きたい作品や表現したい心情に真摯に向き合う過程だったのではな
いかと思いました。山先生がスライドで投写された作品について「もっと綺麗なんです」とおっしゃ
っていたことから、作品の色味は、言葉では伝えきれない何かを表しているように思います。そし
て、香月氏は作品に、シベリアで亡くなった仲間への想いだけでなく、香月氏が体験したシベリア“そ
のもの”を描こうとしていたのではないかと感じました。

また、香月氏は絵だけでなく、絵についての説明、シベリアについての語りという三つの方法で表
現をしていたというお話がありました。制作について、キャンバスに向き合うと絵が浮かび上がって
きて、そこに色を乗せていくだけだというお話を聞き、香月氏が絵から思い出される経験や痛みを、
言葉でも残そうとしていたのではないかと感じました。私事ではありますが、私の祖父は亡くなる数
年前から戦時中の話をするようになり、話を聞くたびに過去の経験を次の世代に繋ぎたいという使命
を感じさせられました。もしかすると香月氏も、生きていくものの宿命として、絵や語りによって
何かを残そうとしていたのかもしれない。そして、なぜ自分が生き残ったのかを自問し、(こころの)

傷を抱えながら作品と共に生き続けたように思います。

香月氏の作品や言葉から、なにかを表現することの意義や、個が表現したものから描き出される普遍について、丁寧に言葉にされながらお話をしていただき、ありがとうございました。



第 76 回研修会

事例検討の場をいただいて

島田 愛乃（静岡県スクールカウンセラー・菊川市立総合病院）

ケースを出しませんかと 1 週間前にお電話をいただき、ぜひとも、という気持ちと、まだ小さいわが子がいるため時間の制約がある中でできるか、という現実的な面で揺れました。しかし、ずっと出したいと思っていたケースが頭に浮かび、今回事例を出させていただくことになりました。夫からはなぜそんな大変なことを引き受けたのか問われましたし、準備を進められると思っていた日には保育園へ行った子どもが発熱し早退(お迎え後は解熱)…それは大変な、しかし久しぶりに自分のために時間を使った貴重な 1 週間でした。

そうした中でケースをまとめながら、当時は思わなかったことや今だから想像できること、このタイミングでこんなことが起きていたのかという気づき、自分の都合で終えてしまったのではないかと悔恨など様々なことを考えました。

そしてなんとか準備を終えて当日を迎えました。京都ということで研修前に寄ったお寺には「念仏申すとは我が身を知る眼をいただくということ」と書かれていました。念仏ではありませんが、今回「我が身を知る眼」をいただいたように思いつつ、このあとにはどんなことが待っているのだろうと考えながら会場へ入りました。

午前中の講習会では、山愛美先生から香月泰男さんの人生やお言葉、作品についての語りを聴かせていただき、衝撃を受けました。外の夏のような暑さとはうってかわって体感温度がどんどん寒くなっていくという、不思議さも味わいました。また、用意してきた自分自身のケースとの重なりを感じることもあり、鳥肌が立ちました。

その後ついに迎えた午後の研修会。最初は自分が何を言っているかわからなくなる位、非常に緊張していました。しかし質問に答え、やりとりをしていくうちにだんだんと自分の言葉で話せるようになっていく感覚があ



りました。それはクライアントの A さんとも共鳴しているような体験でした。A さんと再び会えたような嬉しさもありました。今回事例を出すまでに私が勝手に抱えてきた、さみしさ、申し訳なさがありました。そうした思いも含めて、その場に抱えていただいたように思います。A さんの言葉から連想がひろがり、めぐり、響いていく、言葉では言い表すことが難しく、でも何にも代えがたい貴重な経験でした。

発表を終えてからもずっと、いただいた言葉が自分に響き続けているような、そんな日々を過ごしています。指定討論者の中島登代子先生、名取琢自先生、司会の高橋幸治先生、フロアの先生方、こうした機会を頂きまして、誠にありがとうございました。これからもその響きを大切に、臨床に携わっていきたいと思います。

編集後記 臨心身の研修会に参加していつも思うのは、人と人、場所と場所はつながっているということです。午前中の講習会は午後の研修会とつながり、また、web というつながりだけでなく、空間を越え時間を越えて、つながっていく、そのような場を持つことが出来ていることを有難く思います。

(仁里)

SPACE No. 43

日本臨床心理身体運動学会 会報第 43 号

2024 年 8 月 10 日発行

日本臨床心理身体運動学会

会 長 山中康裕

編集責任 仁里文美

事務局 〒600-8449

京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1

株式会社 木立の文庫内

TEL : 075-585-5277

FAX : 075-320-3664

E-mail : office@rinsinsin.jp